

令和3年度1学期終業式あいさつ

みなさん、おはようございます。

今日で1学期が終わります。今年度も1学期は、新型コロナウイルスの影響で、部活動の原則中止や、暁高祭、球技大会の延期など、皆さんに多くの我慢を強いることになりました。そのなかで、皆さんは、いったん途絶えると伝承が難しい暁高祭の伝統をさらに進化させ、コロナ禍での新しい暁高祭を創造してくれました。また、授業はもちろん部活動でも、先日の球技大会でも、今できることを精一杯やり切ってくれたと思います。皆さんの姿がとても頼もしく見えました。

さて、コロナ禍で暗いニュースが多い中、毎日私たちに明るい話題を届け、勇気を与えてくれているのがメジャーリーグの大谷翔平選手です。私も毎日スポーツニュースを楽しみにしています。大谷選手が、岩手県の花巻東高校から日本のプロ野球に入団した際、多くの評論家は「ピッチャーとバッターの二刀流なんてどうせ無理」、中には「若造が日本のプロ野球をなめている」と酷評した人もいました。しかし、大谷選手は、二刀流への思いを持ち続け、日本で活躍してメジャーリーグに移籍し、幾多のけがを乗り越え、これまでの常識を覆すような大活躍をして新しい歴史を刻んでいきます。私は、大谷選手を見ていると、同じように「どうせ無理」と言われ続けながら、思い続けることで「二刀流」という夢を実現したある人を思い出します。今日は、私が数年前に聴いてとても感動したその人の講演の話を紹介したいと思います。

その講演のタイトルは「思うは招く」、講師は植松努さんです。作家池井戸潤さんの『下町ロケット』のモデルともいわれている人です。2年生は、10月の北海道修学旅行で、植松さんの工場が見学先のオプションにあるということなので、参考にしてください。

植松さんは、現在、北海道で町工場を経営しながら宇宙開発をするという二刀流に取り組んでいます。植松さんは、小さいころ、テレビでアポロ11号の月面着陸を一緒に見ていたおじいさんがとても喜んでる姿を見て、宇宙に興味を持ちました。また、おばあさんに「お金は値打ちが変わってしまう。お金があつたら本を買って読んで頭に入れなさい。」と言われた影響で、子どものころから飛行機やロケットの本ばかり読んでいたそうです。しかし、小学校や中学校の先生から「宇宙なんてよほど頭が良くないと無理だ。すごくお金もかかる。お前なんかにはできるわけがない。どうせ無理。」と散々言われたことにショックを受けます。植松さんは「どうせ無理」という言葉は、人間の自信と可能性を奪ってしまう最悪の言葉だと言います。そんな植松さんに、お母さんが「思うは招く」という言葉を教えてくれたそうです。思い続けたらできるようになるという意味です。植松さんは言います。

「僕らは今、生まれて初めての一回きりの人生をぶっつけ本番で生きているんです。失敗して当たり前です。失敗はより良くなるためのデータだと思って

乗り越えてほしいです。失敗したら『ただいま成長中』って言えばいいのです。これから先僕らがやっていくべきことは「できない理由」を探すことではありません。「できる理由」を考えることです。今日から『どうせ無理』という言葉に出会ったとき、『だったらこうしてみたら？』って皆さんが言ってくれたら、いつか「どうせ無理」という言葉がなくなって、可能性が奪われない良い社会が来ると思っています。やったことがないことをやりたがる人、諦めない人、工夫する人、「どうせ無理」に負けない人が増えれば、これからの日本や世界はきっと良くなっていきます。」

その後も植松さんは、宇宙への思いをずっと持ち続けます。そして、リサイクルに使われる電磁石の製作で成功し、宇宙という同じ夢を持つ北海道大学の永田教授と出会い、何度も失敗を繰り返しながら、従業員が20人ぐらいしかない小さな工場で高度8000mまで到達するロケットや人工衛星の開発に成功します。今では、NASAやJAXAからも工場の見学に訪れるそうです。

皆さん、何事も「どうせ無理」と簡単にあきらめないでください。「思うは招く」。勉強も、部活動も、そして、3年生は受験も思い続けるってとても大事です。私も、「皆さんが畷高で楽しい学校生活を送り、希望する進路を実現すること、そして、畷高が日本一の教育が受けられる高校になること」を思い続けています。皆さんには無限の可能性が 있습니다。この夏休み、自分が将来やりたいことを思い続けてください。「思うは招く」の精神でチャレンジしてください。ただ、少しの息抜きも忘れずに。期待しています。